



この街には、色が無い。なんにもかも灰色におおい尽くされているんだ。

REVIEW

イラク映画「UNDER EXPOSURE 露出不足」4月16日 国際交流基金フォーラム

「バグダッドに安全があるかって？ まったくないね。戦争は終わっていないだよ」。アラブ映画祭2005のレセプション(4月15日)で、バグダッドから来た31歳のウダイ・ラシード監督は、筆者の質問に口元を歪めてそう答えた。彼が監督・脚本を担当して、今年、完成した「UNDER EXPOSURE 露出不足」は、アメリカが終戦をアナウンスした2003年の春以降、イラクで初めて製作された長編劇映画である。若い映画監督が登場し、2003年～2004年のバグダッドの街で映画のネタを探して歩き、幾つかのシーンを撮るが、完成はしない。そういう基本構造である。主な登場人物は5名、お金をかけたセットや道具もない90分の35ミリフィルム。しかし、その全編を貫く、張りつめた、詩的な緊張感に、深い感銘を受けたのだ。

見ず知らずの傷ついた兵士を助け起こして家に運ぶ市民たち、瀕死の兵士と心を通わせる浮浪者、あるいは「今さら映画なんて無意味。家族のことを考えて」と、監督に詰め寄る妻。画面は未だ銃声の絶えぬバグダッドの日常と、爆撃の爪跡が続く街の光景を映し出していく。そこでは最後の希望の火が消えるように、人々が傷や病に倒れていく。どの俳優の演技も、何の誇張もないが、重く深く、痛々しいまでに切実だ。

やがてこの監督は「いったい、この街の何を撮るんだ？ 戦争被害の報告はもう飽き飽きだ。だが、それ以外に何かある？」と、繰り返すつぶやくようになる。撮るものがないという、作家の究極的な失意を通じて、それほどまでに(物理的にも、精神的にも)痛めつけられたバグダッドの現実がひたひたと押し寄せて来る。「そもそも、この街には色がなくなった。すべて灰色のホコリに

覆い尽くされてるんだ」。そして最後の場面、監督はガレージの薄暗がり、石の床に散らばった映画のフィルムを踏みつけて立ち尽くしていた。

ウダイ・ラシード監督は、最近、ベルリン・バグダッド・クラブというシネマテークを立ち上げた。二つの街を結ぶ表現者の交流や上映活動を始めているそうだ。表現者の仲間がたくさんいるのか、という筆者の問いに、彼は力強くう



ウダイ・ラシード監督

なづいていた。本作の日本でのロードショー公開を待ちたい。(CUTIN)



2005年/70分/カラー/アラブ映画祭2005(4月15日～24日)で上映 シンガポール国際映画祭2005(4月)では、ベスト・フィルム賞を受賞した★イラク戦争で、米軍の攻撃で亡くなったイラク市民の数は9万8000人を越えると、英国の医学雑誌「ランセット」が発表している(2004年10月)。ここにはファルージャへの大攻撃は入っていない。また、イラクの国土全体には、湾岸戦争時に、劣化ウラン弾によって広島原爆の1万～3万倍の放射能が投下され、先天性異常児の爆発的な増加などの深刻な影響をもたらしている。今回の戦争でも米軍、英軍が劣化ウラン弾を使用、2003年春には、バグダッドの放射能汚染が国連で問題になった。汚染放射能(ウラン238)の半減期は45億年なのだ。これらのことだけを見ても、終戦という言葉は空虚である。

INTOWN 拒絶の吐息

●3月某日 新宿歩行者天国に突然出現した異形の舞踏家4人。赤いフロックコートの男二人が顔を寄せ合い、憧れるように彼方を望み、アスファルトにふんわりと仰向けに倒れ込む。そして、手足を空の方に伸ばして、丸めた背中の中で揺れている。そのとき、たしかに、その路上に二つの赤い大輪の花が見えた。女二人は、黒髪の下から半眼で宙をにらみグレゴール・ザムザの



赤色彗星館

ように転げ回る。はかないもの、出自不明なもの。その美しさ。不安な破壊の気配、孤高の者たちの拒絶の吐息が、日曜日の午後の大通りの小市民的安穩を、少し揺るがせる。次回公演注目。P4にインタビューと告知あり。赤色彗星館公演「錬金術」6月4日、5日 麻布 die pratzte (井上)

●3月20日 DA・M公演「Hap Py Birth Day / はっぴいばーすでい」。プロシアター 3月19日～21日 DA・Mが、4年ぶりに本拠のプロシアターで公演を行った。

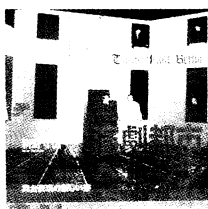
スタートでは、サキ、八重樫聖、脇川海里の3俳優が、壁の方に向けて椅子に腰かけ、化粧のようなことをしている。突然、パパ、髪の毛切つてよ!というサキの「大声」が響く…と、彼女の中の「叫びの衝動」が「大声」とともに解き放たれて空間を揺るがすのを、確かに感じた。ワクワクするような思いで。この夜の作品は、ほぼすべて、(戯曲などの)再現や反復ではなく、今、その場に発生する衝動についての表現—すなわち即興と言って良いと思うが—であった。久々で、純粹な即興表現のインパクトを体験してやや興奮気味。DA・Mが染いた方法の確かさに納得。が、その方法は、この先、もっと明確な社会性を作品に取



DA・M

り込むとき等に、どう変化していくか—。そこに注目したい(井上)。

今、ベルリンが動いている。この街の先鋭たちの活動を網羅し、都市文化の明日を考察する、待望の力作

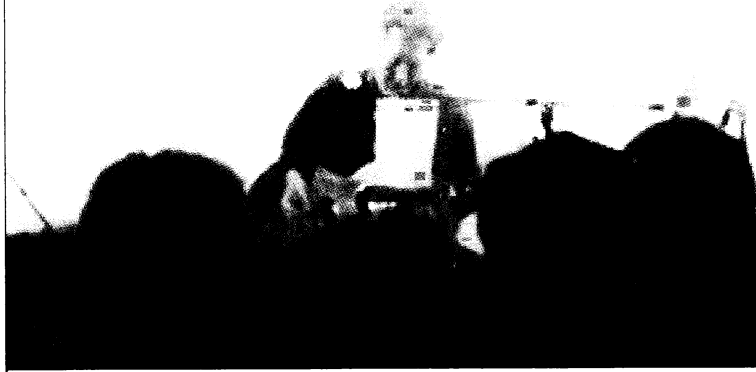


新野守広・著
「演劇都市ベルリン」
れんが書房新社

繊細に、ハードに。縦横無尽に 楽器を鳴らす、即興演奏の手腕

REVIEW

スタイル 秋山徹次ライブ
4月16日(土) 千駄ヶ谷Loop-line



秋山徹次の、CD発売記念、ギターソロライブ。秋山はある時はギター、ある時はピアノと獲物を持ち替え、つわ者ひしめく即興音楽の世界を渡してきたプレイヤーだ。前半はアコースティックギターによる繊細な演奏。時折チューニングを変えながらミニマル、音響、フォーク、カントリー、ブルース等の要素をはらみつつ演奏は続く。この多彩なスタイルは、新しさを求めて新奇な音を試すというのと

だ。この演奏がスタイルの折衷だとかいうのは間違っていて、秋山は既存のスタイルを掛け合わせてるのではなく、ギターの本質を探った結果、そこから生まれてきた多様なスタイルが自然に出てきているだけなのである。そしてこれは作曲家的な音楽というよりも演奏者の音楽とも言えるだろう。演奏家はまずプレイして出てきた音に反応して、また違った音をつなげていく。そのつながり

が良ければ何回か繰り返し、また違うフレーズを足す。これは原始的な即興演奏と言ってもいいが、即興とはまさに「音に語らせる」「楽器に語らせる」ための手段だ。秋山は思う存分ギターを語らせていた。ゆったりとした前半から一転、後半はエレクトリックギターで持ち替え、ノイズな演奏を披露。往年のジェフ・ベックが現代音楽にうなされてプレイしたようなハードなブギースタイルに、待ってましたとばかりに観客はリズムを刻んでいた。目先の新しさなどは圧倒的な音の存在感(一体どんなセッティングであんなぶっつい音が出るのか分からない)に吹き飛んでしまう。また途中挟みこまれるブルース—これも演奏者の音楽だった—も魅力的だった。この「演奏者の音楽」の流れは決して目立たないが、こういう小さな場所で今もまだ続いているのだ。(小笠原幸介/本紙)

異常さの果てに、剥き出しになる 本谷有希子の狂おしいまでの純真

劇団、本谷有希子「乱暴と待機」
4月8日(金)～17日(日)シアターモリエール

文字通り「いまをときめく」本谷有希子が、過熱気味な期待のさなか発表した新作「乱暴と待機」は、いじめ・復讐・のぞき・嫉妬、さらには半ば強要であげく覗かれているセックス等々を、4人の濃密な人間関係に盛り込んで繰り返し広げた本谷有希子の世界的充溢ぶりには目を見張るものがあったが、いささか「演劇」的な面白さに欠ける憾みが残った。

今、本谷有希子の世界と称したのはモチーフの特異性(歪んだ愛憎関係やそれに伴う精神的・肉体的暴力や性的倒錯、およびそれらを示すために用いられる言動)を指すが、「乱暴と待機」でも、上演時間の経過と共に様々な謎が「異常」として頭わになり、ついに謎は自壊しストーリーは放擲され「異常な状態」へと至る展開、重層化されて描出される歪んだ心理や男女関係などには、確かに本谷有希子の作家性が色濃く刻まれている。従って、「乱暴と待機」とはストーリーそれ自体よりもストーリーを利用してその「深さ」を垣間みせる作中人物の心の裏をこそ味わうべき舞台であろう。しかもそこでは毒気のあるユーモアや軽やかな言葉遊びが細部を形作りつつ、「異常」さの果てに剥き出しになる「愛」は狂おしいまで

に切なく過剰なまでにピュアなのだから、単に奇を衒った作品とは格が違う。

ただし、「演劇」という表現形態についての配慮は必ずしも十分だとはいえないように感じた(ちなみに前作では、舞台上の「異常」な出来事や悪口雑言は、上演時間と観劇のバイオリズムとでも呼ぶべきものと見事なまでに折り合い、バランスよく演出されていた印象が強い)。1点は、舞台処理上の必要から多用されたと思しき暗転で、もう1点は俳優の身体(という契機)に関する問題である。前者は、単に暗転の要不要や長さの問題ではなく、その必要性が作品や観客のためではなく、創り手にとっての都合にしかみえなかった。

問題は後者だろう。確かに松本潤一郎が「共犯あるいは不在の原因」(プログ「現代演劇ノート」)で指摘するように、「乱暴と待機」においては「いっさいが嘘」であり、その上演は「演じるという共犯関係の問いなおし作業」にみえる。しかしその時、例えば市川睦隆演じる「おにいちゃん」が、終始足を引きずっていたあの身体はどのようなレベルのリアリティを示すのだろう。もちろん、舞台上の4人の俳優はそれぞれ「乱暴と待機」という物語世界のキャラクターを演じるのだが、本作が特異だとすれば、それは舞台上の現実世界においてすら作中人物達が「演技」をしている、つまりは演じるという行為自体が舞台

REVIEW



上で意識的に演じられている点にある。それは、激しい好意を持ちながらも軟禁とも呼び得る状態としてしか築き得なかった男女関係の基点が、妄想として不在であることに端を発するのだが、ふつうこうした批評的距離は、例えばメタシアターのように構造化されて持ち込まれる。ところが、「乱暴と待機」においては、禁止手であるはずの虚構性の前景化が、キャラクターの特異性と台詞の説得力によって舞台上で成立してしまうという不思議なリアリティを醸し出しているのだ。にもかかわらず「おにいちゃん」の足は、不在であるべき原因によって受けた傷を舞台上でさらし続ける。この時、舞台が保持すべきリアリティの水準は混乱し、あるいは穿った見方をすれば、「乱暴と待機」において身体という契機は物語や人間関係やキャラクターに奉仕すべき要素としてしか意味づけられていなかったようにもみえてしまう。もし、本谷有希子の世界を提出することだけがねらいならば、小説家でもある本谷有希子にとってわざわざ舞台表現を選ぶ必要もないだろう。——と書きながら、ことさら「演劇」や「身体」を云々することが野暮にみえる地平に、「劇団、本谷有希子」の演劇の本領があるのかもしれないという一抹の疑念が頭をよぎる。

(松本和也/日本近代文学・演劇)

INTOWN (P1より続く)



●3月某日 新宿ギャラリー絵夢の矢嶋渉展へ。ストリートアートのような、コラージュのような、いろんなシーンが切り取られて重ね合わせられている絵画作品。情熱と、

存在と、とにかく「アツイ」ものを感じる。30代前半の若手というのに、公募展でいくつも受賞歴のあるだけあり、見ていてもしつこくない。ただひとつ、ギャラリーという場所は似つかわしくないのだ。もう少し、一歩でも、外へ出てみよう。そうしたら開けてくることだってあると思う。どんなジャンルだって、どんなことをしていたって、その一歩にためらったり、どの方向へ足を向けたらいいのか分からないことがある。矢嶋の作品には、その一歩を早く見つけて、もっと住み良い世界がある、と私は思った。3月24日(木)～30日(水)開催(藤田千彩)……

●3月29日 中野成樹+フランケンズ「ラブコメ」。麻布die prazte ワイルダー、サローヤンなどの戯曲を、「ひとごとのように」、かつスタイリッシュに遠景化し、構成主義的な面白さを作りだしてきた、奇妙な群象劇の集団。今回はモリエールの「女房学校」。主観性や感情といった、人間にまつわるものが脱色された人間たちの、どこかロボット的な存在性。だがそこに、そこはかとないユー



モアが漂っているのは魅力。この表現がどのような育つのか、当分注目したい(サトウ)。

犯罪友の会という怪しい名称の劇団が 関西からやってくる。

劇団犯罪友の会『手の紙』☆作・演出=武田一度
◎5/27(金)~5/30(月) タイニイアリス

COMING

その劇団名ゆえにあらぬ誤解や中傷を幾度も受けたことがあるというこの劇団は関西野外劇連盟や飛田演劇賞の産みの親でもある主宰の武田一度が1976年に結成したものである。

建築用丸太を千本以上使って作られた野外劇場と緻密に再現された江戸時代の長屋や町人文化の風景をバックに、侍や歴史上のエライ人物ではなく、無名の十手持ちや市井の人々の悲哀と笑いを描いて、関西では絶対的なファンを持つ劇団のひとつだ。

犯罪友の会 = 犯友は90年代初め頃から小屋芝居にも挑戦し始め、「赤と黒」、「風と刀」の二作品はバリ公演も行っている。東京公演は98年の野外劇「牡丹のゆくへ」以来のお目見えだ。

ハワフルな男芝居を得意とする犯友だが旗揚げ時からの看板役者、せるふたいま、小川トの姿がないのは寂しい。だが今回は昭和30年代半ばを舞台にしたラブストーリーという。成長著しい川本三吉に怪優・玉置稔やテカコ=マリー、若手女優の羽田奈津美がどんな舞台を見せてくれるか注目している。アリス(風いく太)

旧軍人達のクーデター未遂事件を 背景にしたロマンス

『手の紙』のノート/武田一度

人の心は、不器用なものです。

まして考え方などコロコロ変えられるワケがない。一度惚れた人を簡単に忘れられるワケがない。ある老婦人がわたしに尋ねた事がありました。

「永遠のロマンスを、信じられますか？」

「ひとによれば、あるでしょうが、ただし、わたしでない」このひと、にとって永遠とは、何十年くらいのことなのだろうか？

六十年前、敗戦という絶望的に価値観の転換を強いられた世代は、何を捨て何を受け入れていったのだろうか？

戦後世代の私達も、この六十年間の価値観の変換をキーボードを押すごとく簡単に強いられているのが、今である。

昭和の時間を、もう一度見つめ直し検証する時期にきているのかもしれない。それも早急にと、昭和三十年代半ばの物語を作ってみようと思いついた動機です。

兵士達のイラク派兵、憲法改正の世論、目まぐるしく変わって行く、変わって行く。この物語は、実際に起こった三無事件という戦後唯一、破防法のかかった旧軍人達のクーデター未遂事件を背景にした作品で、とある関西の田舎町の食堂での話でロマンスの物語でもあります。

公安の刑事達の目が光るなかつとも変わりなく町の若者達と暮す主人公、過去の事など誰も知らないし、話す相手すらいのないのどかな生活、陰でイヤイヤだが軍事訓練の手引きをしていることで揺れ動く心のスキ間、それを見抜く老練な公安の刑事、突然店に訪ねて来る主人公のかつての恋人、十七年に渡る文通相手でもある。不器用な恋の表現である。愛する事に誠実であればあるほどダサくて不細工な恋の表現に陥ってしまうのが男の常である。格好いいトレンディドラマのように、行かないの

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

がロマンスなのです。この主人公のロマンスの行方は……

さて私達、劇団犯罪友の会の劇団の紹介もしてみます。

大阪の地で野外劇を中心に公演を行っています。もう結成以来三十年になります。ここ十五年は江戸時代の庶民史をテーマにした物語を作ってきました。関西では犯友時代劇と呼ばれています。最近三年は女目明かし一本柳のお糸捕物帳シリーズでチャンバラ活劇を野外劇として連作しておりました。

チャンバラ命と思っております。

難しい芝居ではありません。ただひたすら楽しい、おもしろい、切ない時代劇を目指しているのが劇団犯罪友の会の芝居です。

そういう野外劇の作品とは色合いの違った「手の紙」という作品ですが、昨年、大阪で初演したもので、好評を得ました。劇団犯罪友の会が自信をもっておくりする「手の紙」をぜひ御覧下さい。

大阪の舞台俳優達の演技も是非見届けてください。彼等はスリリングで素敵な舞台俳優達です。是非出会ってください。

合掌

→劇団HP…<http://www.yo.rim.or.jp/~hgcymink/hantomo/>



演出家の孤立、ないしは「君主性」が、 日本の演劇シーンを閉塞させていないか。 ドラマトウルクという職種の可能性を追うシンポジウム。

"dramaturg?"

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.17

アートネットワーク・ジャパン
講座シリーズVol.3
「ドラマトウルク」の可能性を巡って
3月22日◎東京ドイツ文化センター

ドイツでは演出家とならび、演劇作品の創作に重要な役割を果たす存在「ドラマトウルク」。この日本ではまだ馴染みの薄い職種にスポットを当てるシンポジウムがアートネットワークジャパンの企画によって開催された。冒頭、東京国際芸術祭ディレクターの市村作知雄氏による趣旨説明の後、日本でドラマトウルクとして活動する平田栄一郎氏(ドラマトウルク・慶応義塾大学助教授)、長島確氏(翻訳家・ドラマトウルク)、ドイツからのスピーカー、ウーヴェ・ゲッセル氏(ベルリン演劇祭国際フォーラム部門チーフ)、ベッティナ・マズーフ氏(ベルリンHAU劇場ダンス制作部チーフ)の4名がそれぞれ報告を行った。

戯曲の解釈を作品の創作に結び付ける

平田氏の報告によると、そもそも演出家や作家と同じような意味合いで使われてきた「ドラマトウルク」という言葉はレッシングの著作以降、演出家の作品制作の相談者、共同制作者を指すようになったが、特に古典作品の上演の際には、その戯曲についての情報収集を行い、演出家の戯曲解釈に助言をする職種という意味が強いという(日本ではドラマトウルクという言葉は一般的に「芸芸部員」と訳される)。しかし、ただ研究論文等からもっとも正しい解釈を選びだすだけでは、作品の創作には不十分であり、そこが文学研究者とドラマトウルクの仕

事の違いである。ベケット研究者の立場からスリーポイントプロデュース「ベケットライブ」に参加し、作品で扱うテキストの吟味を行った長島氏の報告からは、テキストの多様な解釈を創作にどのように結び付けるかの難しさが窺えた。その際、学問的に「正しい」解釈を押し付けるのではなく、あくまで一つの「素材」として現場に提供することが重要だという意見が述べられた。その報告からは戯曲と俳優、演出家を結びつける存在としてのドラマトウルク像が浮かび上がった。

創作に直接関わるドラマトウルク

一方、マズーフ氏がドラマトウルクをつとめたメグ・スチュワート振付けのダンス作品では、用いる映像、音楽、衣装などの素材を集めることもドラマトウルクの仕事であった。作品のモチーフになった精神病の症状について、専門科の医師を現場に招いてダンサーとディスカッションする機会をもうける等の事例からは、作品を振付家/演出家とともに一から作り上げる、創造的なパートナーとしてのドラマトウルクの活動を知ることが出来た。

上演企画から創作の現場まで

また現在では劇場の上演企画など、ディレクション的な活動を行うドラマトウルクも多く、ゲッセル氏の報告からは企画の仕事から制作現場での俳優と演出家の意見の対立の仲介役まで、その幅広い活動を窺い知ることが出来た。また平田氏の報告にもあったが、ドラマトウルクの活動には、作品のアフタートークやシンポジウムへ

の参加等の活動も含まれており、その活動範囲は作品の内部だけでなく、観客と作品との間にまで広がっている。

作品の創作を支える「もうひとつの視点」

このように「ドラマトウルク」の意味は非常に広いが、まとめるならそれは、演出家とは別の、総合的な視点から作品の創作に携わる存在であると言えるだろう(ドラマトウルクの中には文学や芸術のみでなく、社会学や哲学を修めた者も多い)。また、ドイツではドラマトウルクは「作品にとっての最初の観客」という言い方をされるといふ。この表現には、演出家の独断だけで生み出された作品は普遍性を持てるだろうか、という問題意識が潜んでいるように思える。マズーフ氏とゲッセル氏がともに思考とは2人の人間の間で行われるものである、というドゥルーズ/ガタリの思想を引用して、作品を対話の結果であると主張していたのが印象深かった。

演出家のみが大きな権限を持って創作を行う日本の演劇界に、このような「もうひとつの視点」が入り込むことが出来るだろうか。そのためにドラマトウルク制度を単に取り入れればよいということではない。必要なのは作品の創作というのが制作者/戯曲/演出家/役者/観客…といった様々な要素の関係性の中で成り立っているということへ意識を向けることであろう。ドラマトウルクの活動を知ることによって、結果として日本の演劇界に欠落した視点を浮かび上がらせるシンポジウムであった。(CUT IN)

元藤アキ子氏という母胎の喪失を契機とする「悲哀の仕事」を、完結させたいのです。



点滅さん(赤色彗星館)インタビュー

「赤色彗星館第七回舞踏公演『錬金術』」6/4(土) & 6/5(日) 14:00 & 19:00

問=090-8516-6005 作・演出=点滅 出演=点滅 泰造 八田絵理奈 野村朋香 神宮寺信代 山谷仁美 @麻布die pratz

●まずは赤色彗星館の名前の由来から教えてください。
点滅——個人的に稲垣足穂が好きで、彼の小説に類出する「赤色彗星」という言葉に惹かれてつけました。

●赤色彗星館は第二回公演以降、活動の総称を暗黒遊戯としていたわけですが、今回舞踏公演と銘打っているのは何故ですか？

点滅——僕等は舞踏による身体性、精神性を基本にしつつ、それに演劇的な構成技術、空間演出をプラスしてきました。そういった意味で内外問わず、舞踏という分野にこだわらないよう「暗黒遊戯」としてきたわけです。今回「舞踏」と戻したのは、やはり恩師である元藤アキ子氏(土方巽記念アスベスト館館長)が逝去された事が契機となったと思います。それによって僕等は精神的に完全に孤児となってしまった。この母胎の喪失から来る「悲哀の仕事」みたいなものを完結させる為に、師が生涯かけて守ってこられた舞踏と、いうものに真摯に向き合おうと思ったのです。今思うとここ十年、師の大きな掌の中で文字通り遊ばせて頂いていたような気がします。

●赤色といえばお二人(点滅・泰造)だけでの舞踏ユニットという印象が強いのですが、今回他に出演者を出される経緯というか、

理由をお聞かせください。

点滅——1996年の旗揚げ以来、そこに創った器の中身を満たしていくという作業を二人でしてきました。前回の公演(花様幻想)でそれが有る程度納得いく形になった。そこで今度はそこから溢れ出すものを受け止める器の方を上げていく過程に取りかかったわけです。舞台に二人以外を上げるのは、その一環としてです。

●今回の作品『錬金術』について教えてください。

点滅——少し錬金術の説明をさせていただきます。錬金術という一般には卑金属を黄金へと変える秘術と思われていますが、それに供ない術師自体も精神を変容させていくんです。逆に術師が変容しない限り、黄金の誕生も有り得ない。同時にそれが客観世界へも影響を及ぼしていくという考えなんです。錬金術ってそういう「天地の照合」や「全一思想」といった理念とか思想とかがやたらと多くて、むしろ哲学の領域に近い。かと思えば、実験によって人間そのものをプラスチック内に造り出したという様な文書まであったりする。サブのアイコンにも「両性具有神レビス」とか「世界の象徴としての蛇ウロボロス」、あと例の「人造人間ホムクルス」など魅力的なものが多くて、そういった世界観みたいなものを形に出来ればと思って創りました。この作品は、簡潔に言うと錬金術師の主観世界(内面)の変成が及ぼす客観世界(王国)の変化、歪みの物語で、一種の寓話だと考えて頂いて構いません。作品の中で、王様とその

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

王国を訪れた錬金術師は、一つのカードの裏と表の様なもので、実は一人の人間の二面性であると考えられることも出来る。微妙なバランスの上に成り立つこの二つの存在は、そういった意味で一方のみの存続は有り得ないのです。中盤で術師は実験(哲学の水銀と哲学の硫黄の混合→黄金の誕生)を出演者の肉体を使って行いますが、終景では過去の偉大なる術師達が誰ひとりとして成し得なかったその成果をお見せ出来るかと思えます。実験が成功したら、の話ですが……

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratz

5/27(金)~5/29(日)

劇団W.I.T.

~ようこそ、わなへ~

「ひかり1975 ひよこ2005(前編)」 問=090-8170-0856(劇団W.I.T.) ◎新幹線博多開業から30年。ひよこことながらそのチキンレースが始まった。この世で光より速いものは? スパイを見分ける方法は? あの日消えた超特急は今?!



◆麻布die pratz

5/28(土) & 5/29(日)

劇団オグオフ

「満腹王国~料理と音楽と3つの王国の物語~」

問=090-4825-8730(劇団オグオフ) ◎とある小さな国 人々は明るく陽気、そして何よりも食べる事が大好き。しかし、その国には秘密があった…人は皆、誰が為に食べて寝るのか。



schedule for MAY 2005

TINY ALICE

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307

5/3(火)~5/4(水) ■ドロップD

「これからこいつとxxx」 問=090-6007-5128 skra-juno@t.vodafone.ne.jp (大川内) ☆作・演出=飯田ゆかり ☆出演=達澤純世 清水ひろみ 高橋一路(feel & move)、前田智信(劇屋いっぶぐ堂) 松永衣吹 山口健太郎(劇団共倒れ) 山崎吉範(Theatre 劇団子)

◎飯田ゆかりの新ユニットはコント・芝居の集大成

5/6(金)~5/8(日) ■E.G.WORLD III

「みにくいアヒの子~突然変異は、未来の常識~」 問=03-3361-9758 ☆作・演出=金堂修一 ☆出演=出口恵子 ニーナ・ティグバ 永井陽子 中須隆二 根元千可子 林真紀子 蛭田真知子 谷部聖子 ◎存在感のある本物の役者と、存在感のある本物の芝居を目指して、メンバー全員がゼロから挑戦する

5/11(水)~5/15(日) ■桜会

「P~天才って何?~」 問=03-3401-4403 ☆作・演出=阿部良 ☆出演=伊藤初枝 森島朋美 ほか ◎シェークスピアの戯曲を題材に上演を続けている演出家・阿部良の新作

5/19(木)~5/22(日) ■劇団花鳥風月

「プリーズター」 問=048-885-7358 kachofugetsu@hkg.odn.ne.jp ☆作・演出=山内大典 ☆出演=比良文彦 田村實浩 墨田恭靖 小目淳一郎 西地修哉 伊藤康将 太田淑恵 赤座直樹 三村サルーチ 市川典子 ◎昨年の池袋演劇祭大賞受賞。一昨年は豊島区長賞、その前年は優秀賞を受賞している劇団がアリス初見参

5/27(金)~5/30(月) ■劇団犯罪者の会

「手の紙」 問=06-6448-0567 hantomo@cw202.bai.ne.jp ☆作・演出=武田一度 ☆出演=川本三吉 羽田奈津美 中田彩葉 玉置隆 徳カルコ・マリ 小野正樹 金城左岸 山田山 瀧波四級 ◎維新派と並ぶ関西野外劇の雄ハントモの8年ぶりの東京公演

神楽坂 die pratz

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

4/29(金・祝)~5/1(日) ■Maki.com.X

「ラフ~おとぼけ大作戦DX」 問=090-6543-1387 ☆作・演出=平山潤一郎 ☆芸術監督=酒向芳 ☆出演=天野裕也 竹花典子 前川真 奥田宏二 小山太郎 松尾藍かなゆこ ◎ポテンシャルキング激賞劇誕生! 全国の探偵事務所に成功報酬三億円の依頼。マキコム旗揚げ大感謝祭公演にいらっしやいませ!

5/3(火・祝)~5/5(木・祝) ■ド・ピンク

「夢と魔法の王国」 問=090-9104-3055 ☆作・演出=猫

道(猫道一家) ☆出演=大口達也 山主晃一 吉田ミサイル 小川実香 他 ◎ド高級キヤバラのVIPルームには「夢と魔法の王国」への入り口があった! 猫道一家の猫道が、「ハリウッドと賢者の石」を無許可大胆リミックス! 破破破破!

5/6(金)~5/8(日) ■ニヤハ企團

「洞察/放つ衝動vol.5」 問=090-8487-0050 ☆出演=野和田恵里花 松本大樹 若松智子 笠井瑞丈 Jou 白井さち子 奥田純子 ◎1.まずは各Soloを味わう(5/6 5/7 16:00~) 2.かざね合わせで味わう(5/7 19:00~) 3.再びSoloにどす(5/8 16:00~)この行程で体はどう変化する?

5/14(土) & 5/15(日) ■第③水曜日

「アメフルカラフル」 問=042-397-7571 ☆作・演出=姫咲花梨 ☆出演=高澤いちご 東初音 藤田篤史 本間康介 永井篤 江川彰浩 他 ◎いつもと同じ朝だった。あの駅に着くまでは、とある駅のホームで電車を待つ6人のそれぞれの「想い」とは……

5/20(金)~5/22(日) ■石神井童貞少年團

「童貞少年天球」 問=090-5991-8228 ☆作・演出=森田金魚 ☆出演=斎藤陽子 西恵美咲 永岡一馬 他 ◎石神井童貞少年團、一年ぶりの公演!神楽坂で出演者も新たに再始動。乞うご期待下さい!

5/27(金)~5/29(日) ■劇団W.I.T.~ようこそ、わなへ~

「ひかり1975 ひよこ2005(前編)」 問=090-8170-0856 ☆構成・演出=しなやかしなちゃん ☆出演=ガーギー木村 てんこ しなやかしなちゃん

6/3(金)~6/5(日) ■NILプロデュース

「ヴァニティーズ」 問=03-3709-0409 ☆作=ジャック・ハイナー ☆演出=河田園子 ☆出演=大坂史子(昂) 島美布由(俳優座) 入江純(演劇集団 円) ◎同じハイスクールで学んだ仲良しトリオの10年間に及ぶ交流を描いた3人芝居。彼女達それぞれの見栄、空虚、はかなさを痛切に映し出した問題作!

麻布 die pratz

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F03-5545-1385

die pratz M.S.A. collection 2005

■ルームルーデンス「夜長娘と耳男」

5/3(火・祝) & 5/4(水・祝) 19:30

5/5(木・祝) 19:00

☆演出=田辺久弥 ☆出演=田辺久弥 大根田真人 棟方絵夢 渡部朋子 ☆照明=橋本剛 ☆音響=志和屋邦治 ◎1995年、元万有引力の田辺久弥を中心に結成。池袋文芸座ル・ピリエにおいてソフォクレス原作「オイディプス王」を上演。その後2001年より海外公演を視野に入れた活動を始め、2003年には中央ヨーロッパに日本の先端劇団を紹介するJapanNowに参加、アイスキュロス作「エレクトラ」にてギリシャ・スイス公演を行う。なお本公演はプロと高校生が行うエデュケーションプログラムを各日マナネを行う。

——一般の公演(フェスティバルとは関係ありません)——

5/7(土) & 5/8(日) ■演劇劇団海賊船II

「乱波II~真田幸村疾風怒濤の巻~」 問=090-8545-4899 ☆作・演出=糟谷卓司 ☆出演=山口純 YA-SU 佐伯智和 川崎稚子 祖父江真弓 岡本愛 本間知花 森里司 栗林栗子 渡辺浩司

5/10(火) & 5/11(水) ■劇団上田

「上田展(Spring)」 問=090-7221-9080 ☆作・演出=劇団上田 ☆出演=江戸川利丸 荻原もみち 春日井一平 地獄宮三番地 爺隠才蔵 他 ◎その屋敷には一人の男が住んでいた。夜な夜な響き渡る不気味な奇声。一度入ったら二度と出られない。上田式サイコホラーエンターテインメント、いざ御堪能あれ!

5/14(土) & 5/15(日) ■DANCE HOUSE

「DANCE HOUSE 021」 問=03-5978-5263 ☆総合プロデュース=片岡康子 ☆出演=中野真紀子 野口暁 平田友子 昆野まり子 桂田真子 大竹千春 谷野悦代 他 ◎ダンスシーンにおける総合的な活動の場を広げようという片岡康子の主旨のもと94年に結成。以来国内外で20回の公演を行い、数々の新作を発表してきた。

5/19(木)~5/23(月) ■しずくまち

「アヲ食ル!」 問=090-1791-5452 ☆作・演出=ナカヤマカズコ ☆出演=岡島仁美 山崎龍一 伊藤美紀 堀米綾(ハーブ) 他 ◎近未来。おじさんだけの世界。汚染によりすべての女性が死滅した。残された男たちは「ダンディズム」に生きるよすがを見つけた。男達を待ち受ける運命とは?

5/25(水) ■HUTANG

「BIRTH [誕]~泡が生まれたい日~」 問=090-9386-4209 ☆振付・構成=HUTANG 出演=酒向治子 大村亜希子 架川真理子 石川健次郎 他 ◎2002年より活動を始めたコンテンポラリーダンスのユニット、HUTANG初の単独公演。コンテンポラリーダンスとは何かを自らに問い掛けた新作を上演。

5/28(土) & 5/29(日) ■劇団オグオフ

「満腹王国~料理と音楽と3つの王国の物語~」 問=090-4825-8730 ☆作・演出=内沢信介 ☆出演=清生和也 3好理代 呉屋希美 重永弘毅 畑ひろ江 岡部誠 他

6/4(土) & 6/5(日) ■赤色彗星館

「赤色彗星館第七回舞踏公演『錬金術』」 問=090-8516-6005 作・演出=点滅 出演=点滅 泰造 八田絵理奈 野村朋香 神宮寺信代 山谷仁美 ◎'96年結成、舞踏表現を通じ自らの世界観を体現してきた赤色彗星館。今回は卑金属を黄金へ変える『錬金術』をテーマに、その実験を出演者の肉体を使って再現した。

折り込みチラシ募集

チラシをCUT INに折り込みませんか。タイニイ・アリス、ディーブラットで配るCUT INに、チラシを折り込む業務を始めました。月に5000枚、値段は格安でお引き受けします。CUT IN編集部までご連絡ください。03-5366-8646(井上) jiro-i@za2.so-net.ne.jp